

CIEC 第 46 回研究会報告

テーマ：「大学生協の学生向けパソコン提案の取り組みと実際」

日時：2004年7月3日（土）14時～17時30分

会場：大学生協杉並会館

報告1 『2004学芸大PC報告～必携,その後・・・』

石黒 伸享（東京学芸大生協 店長）

報告2 『人材育成大学と生協「学生生活応援講座」』

元村 雅登（福島大生協 専務理事）

まとめ 内赤 尊記（千葉大生協）

討論司会 石原 裕（埼玉大生協）

司会 仲田 秀（明治大学）

（敬称略）

昨年の第37回研究会では、2004年4月の法人化に向け、国立大学が「情報教育」環境充実のために取り組んでいる「PC必携化」や、「学内での学生個人PC利用環境の整備」について、教員の立場から、大学生協に対して今後どのようなことが望まれていくのかにまでわたってご提言いただいた。それを踏まえ今研究会では、実際に新生生に対してPCを提供する側である大学生協の立場から、二生協の実践について報告を受けた。

学芸大からは、PC必携化二年目を迎えるにあたり、大学側からあらためて機種選定の際にリクエストされた内容や、販売についてのシビアな要求などと合わせて、販売時における接客内容や使用開始後のセキュリティ対策や修理対応など、実際に購入者から求められるサポート内容や販売担当者としてのスキルについてなど、いかにして大学側に「パソコンの提供元として生協を選択してもらおうか」という視点で報告された。

福島大からは、大学法人としての中期計画に掲げられている「人材育成」を、生協自らのミッションとして位置づけていること、その上で生協が大学に貢献する立場で、単なるコンピュータ教育としてではなく、人材育成の一環として行った今年度のパソコン講座について報告された。その中で、PCを購入し参加する新生生のみならず、講座そのものを中心となって計画・実行する学生スタッフと、スタッフを後押しする立場の生協職員の成長も含めた、総合的な人材育成がすべての根本となっていることが強調された。

【各報告及び質疑で出されたポイント】

『学芸大』

- ・学内にある生協は、大学から見れば逃げられない存在。生協としても逃げるつもりはない。
生協側としては、申し込みに対し供給数量を不足させるわけにはいかず、サポートや修理対応など逃げるわけにはいかない。
- ・「サポート」の意味を曖昧にせず、様々な側面から考えるべき。
仕様を大学の利用環境に限りなく近づけることや、販売接客時に最大限納得して購入してもらうこと、ウィルス等の重大問題の告知などを行うこともサポートである。

- ・大学生協だからできること,求められること。
日常的な対応と情報の蓄積ができ,他大学の事例交流ができ,トラブルの切り分けのためのスキルを持っているなど。
- ・大学生協が,大学という教育現場のキャンパス内に存在するということは…。
教育環境に適合した商品・サービスを提供し,同時に啓蒙活動や教育活動の一端を担うべき使命を背負うということ。

『福島大』

- ・「パソコンを売っている」のではなく,人材育成を目指した「学生生活応援講座」である。
パソコンスキルを持つことは福島大生にとって将来のために必須である。教育・人材育成という視点で,パソコンを学ぶのではなくパソコンを活用した大学生活の送り方を学ぶための講座。
- ・大学の目標と生協ミッションをリンクさせ,その中での学生生活を見据えた計画を行う。
人材育成大学であること,キャンパス特性,在学中の生活及び卒業後も視野に入れ,4年間の学習プランを立てる。
- ・目標は人間としての成長(人材育成)である。
参加者,学生スタッフ,生協職員の関わったすべての人が,学生としてとして,人間として成長していくことが最終目標である。
- ・学生スタッフの力や主体性をどう生かし,どう尊重していくのか。
取り組みが広がり,販売台数も増えていけば,ますます生協職員だけの力だけでは支えきれなくなってくる。

【報告とその後の総合討論から,今後の課題・研究テーマとすべき内容】

キャンパス内に存在する大学生協が,PCを提供しサポートすることに対し求められること,大学法人・購入者・メーカーの立場及び,教育という視点から,再度確認する必要性がある。

・教育・学習の道具としてキャンパス PC を捉えた時に,現状の内容で満足なものであるのかどうか。

・日常的に取り扱う修理含むサポート情報の蓄積,あるいは共有をどのように行っていくのか。

・セキュリティ対策やトラブルシューティングなど,相談窓口としてのスキルアップが不可欠である。

これまで販売後のサポートとして取り組まれてきていた各種PC講座が,単なるPCやアプリケーションの操作スキル獲得のためのものではなく,参加者・関係者の「学びと成長」を育むものへと変わってきているという事例が報告された。今後必要とされていくサポートとは何かを検証する。

・学内組織として,学生自身の力を生かしていくことで,どのように学生の「学びと成長」を促していくことができるのかについて着目すべきではないか。

・パソコンを活用する能力の育成,あるいは学生生活の道具として使いこなすためのフォローアップをどのように行っていくのか。